

河合氏藏書



乾峯和尚諱ハ士曇筑前の人あり南ハ士雲禪師の法嗣
 南禪寺龍興菴東福寺菩提院等の岡ハ貞和五年ハ六十
 五歳乃時ハ弟又鎌倉荏柄社ハ小社像と同一を藏す
 但為天化藏主仁ハ書文和四年六月六日と有り全一仁
 山ハ尊氏郷道号好ハ尊氏郷書ハ奉為仁ハ親公大福定
 書寫畢正二位源尊氏と興書ハある法華經鎌倉圖覺
 寺ハあり之品觀公ハ尊氏郷乃父貞氏郷ありと云
 貞和元年天龍寺供養ハ光明院若殿院乃陣中ハ臨御
 有ク九十七代乃皇行幸を成なりク勅願了准と也と夢窓
 縁を嗣とらる乃徒弟驕慢乃心を起ハ將軍を勸とらハ即奏聞有ける
 勅許ありけるは之ハ門乃大元傳同也也を障中々ハ行
 幸ハ罷らさる八月廿九日將軍兄弟ハ葉車ハ駕しハ桑向

せらむ大會事故かく遂行の道一顧る暇日不御結縁乃為と
て花園光嚴兩上皇御幸あり侍連へ公門乃噉詐徒不しく
檀越歡喜乃眉を閉けり貞和四年上杉重能畠山直宗師直
兄弟乃驕驚放逸を憎く是を戒り執務を申を直義朝長
と共計り不軌のれふの却り研直りため不圍よ不將軍
須賀清秀をく事乃子細を問ひけり諺長を誅殺せ
むを後將軍止とを治ま是を許し直義朝長乃政務を
止め上杉畠山を越前子流し追くちを殺し鎌倉乃義
詮朝長を呼よき直義朝長不代々軍國乃事を執りたを
らむは是利家乃管領強くし應仁の大亂とあふ
不堪と直義朝長京都將軍家乃成敗を見ら爰不致く歎息
の傳不題を盡し爰不將軍の末子右兵衛直義朝長と

て中園乃探題了補きり備後國へ下向ありける直義朝
長乃猶ふありくい石見國乃三角入邊を治りて謀殺し師
直師泰を討りてを議ると聞えけり將軍師直師泰を討
り不向りしけり其頃久濃國乃土岐墨俣八郎周濟房將軍不
背き旗を掲げしは是を征伐せらむんため師直兄弟を呼返
さる直義朝長いふ力さゆ中園大く打退へり是日都へ
攻よるふんと早馬志を波を打り告げしは尊氏向く叶ふ
やうく將軍打退るとせし扱半たり不直義朝長いつち
とゆかく立退る定めく宮方へ合体ふるへゆぬ大軍師と
人さ呼屋を合ける不將軍ハ物乃やとゆ志ふは備前國
へ下向す師直同六年直義朝長もくく宮方あり終ひ

將軍乃留守を幸ふ都を襲ふをせしむる義詮朝長一支部支
みもは燕らむる西岡あつ將軍ふ多り會せむる共子系へ
寄せ敵を連燕せんと云と味方の次第ふ燕失敵りの
益勢かちりけむの將軍書寫山へ引退き一人のふ不堂
頼房直義朝長了馳加ちり書寫山を襲ふんとするは聞
御影濱ふく合戦けりふ將軍打負ふに松岡城へ走入り
軍勢乃着到をけりふ五百餘騎ふに過せりり將軍師
直兄弟を召く今ハ是とあり自害志く恨を泉下ふ報ひ
ありと申す清く思切せむ一人の雷ふ落たりと噂き
壇場氏直曉りくよ立還直義朝長乃陣ふ約向ふく和談を
結ひくハハ林楚忽子御自害有へり寸と申ふまは將軍の

是を破らふへふあつ孫の諸將と共都へ引返させ孫ふ
師直兄弟難發く罪を謝ふんと心痛志らむとと踏次めて
誅せらむる軍國乃首尾ふく直義朝長乃掌握り歸
まふを以仁木頼章細川頼春と波頼康佐と木道榮等
互に権威を争ひ黨を立しふ將軍兄弟伯父甥乃同終
り私に雙方了申言する人有く薄き氷を踏りぬり世と
ありつるふ依く直義朝長越前國へ落ふ將軍出進を攻
らむんため逆に國へ殺向ありけりふ依る本仁木土波乃一
族逃系りく大勢ふありふり直義朝長一軍く終り
叶ふ人鎌倉を志く逐電せらる將軍のく發向有へ
りつと申す由都子去へり大將乃立ませぬ官軍時を得

都みやこ不攻せめ入いらんと疑うたが有あるへく寸すんと必かなくれけしは尊氏たうじ卿けいの至いたり
ける崇光たかみつ院いんを廢やぶりしむる吉野よしの乃すなはち天子てんしを都みやこへ還幸くわんざうあり
るへくはたし終はつへと中津なかつ河がわらふりける赤松あかまつ則すなはち松まつ乃すなはち
吉野よしの教のう了り候しほしと將軍かうぐん乃すなはち河内いわたを執とりけるふり吉野よしの教のうふ
伴ばん々々尊氏たうじ卿けい乃すなはちさるるふにせと直義ちやうぎ朝あそん長ちやう
成なせけり將軍かうぐん謀まうありぬと悦よろこぶ義隆ぎりゆう朝あそん長ちやうを京都きやうと乃すなはち留守るせと
自進じしん發はつありける諸國しよこく乃すなはち軍兵ぐんべい大方たうほう直義ちやうぎ朝あそん長ちやう乃すなはち催さ從じ小從せうじひ
鎌倉かまくらより下向げかうしける將軍かうぐん乃すなはち御方ごほうより系けいる武士ぶし以もつ外がにまり
去さりと止とまへくふあら孫まごの進しんと薩さつ埴やまへ向むかへ直義ちやうぎ朝あそん長ちやう乃すなはち
先陣せんじん石堂いしどう頼房らんぼうと戦たたかふ代時よりのとき守都しゆと宮みや氏うぢ綱つな下げ野國のくにあり旗はたを上あげ
將軍かうぐん方ほうより系けいる直義ちやうぎ朝あそん長ちやう敵てきを東西とうざいより更さらく智恵ちゑを盡つすと

云いと中なかつ遂すい不ふ打負うちせ候しほ夏なつ乃すなはち中なかつ不ふ遁とんせけるを將軍かうぐんより懇こん不ふ
さ勢せいふへ直義ちやうぎ朝あそん長ちやう過かを悔くふ鎌倉かまくらへ系けいらるる遂すい不ふ安あみく
薨こうせらるる其頃そのころ新田あたら義興ぎきゆう義宗ぎしゆ服屋はくや義治ぎぢ武務ぶぶ上野うぢの乃すなはち兵へいを起おこ
て安房あは上う總そうを打うち從じゆへ鎌倉かまくらへ攻せ來らると同おなくふより鎌倉かまくら
を去さり坂東さかとうへ皆敵みなてきとあるへく去さり以もつ是こゝを伐うて敵てきを遠方えんぱう
へ追お追おる將軍かうぐん乃すなはち百騎ひやくきを從まへて武藏むさし野のへ打うち向むか
ると追お追おる小久米こくま川がわに八萬餘やちまんじゆ孫まごありふたりは勢せいをいふふ
て小こ子こ差さ系けいより打臨うちりんし將軍かうぐんハ義宗ぎしゆ乃すなはち小こ向むかへく戦たたかを挑いれ
軍ぐん乃すなはち石濱いしはま今多いまた麻ま郡ぐんをさして落おち玉たまへ仁木にぎ頼章らんぢやう義長ぎぢやう
ハ義興ぎきゆう義治ぎぢと戦たたかふ是こゝに勝かちと云いふと直義ちやうぎ朝あそん長ちやう敗軍ばいぐんを逃にり
て鎌倉かまくらより攻せ入いらるる將軍かうぐん乃すなはち留守るせと鎌倉かまくらより置おきたる

基氏朝長一戦不利を失ひ鎌倉を落し以將軍乃義宗と笛
吹峠に戦ふくまも不勝大軍をくぢへり武義の陣へ馳
入り一手不ありをく鎌倉へ發向有けり不義興義治小勢
あく叶ふくく鎌倉を引退けり將軍直子入替を以入同八
年將軍久く坂東に坐し志し軍志むく利を失ひ入八と
京都へ回し入八より名時氏より時節と思ひ入八より官軍
と謀し合を京都を襲ひたる不義詮朝長忽ち折負後光嚴
院乃齋婆子供奉く義濃國へ引退ける由鎌倉へ注をせし
より將軍基氏朝長を留め關東乃管領とあり自諸將
率ひく上流あり迎に國鏡驛あり義詮朝長より遇に都へ還
入る仁木頼章を以執事とされたり同九年直冬朝

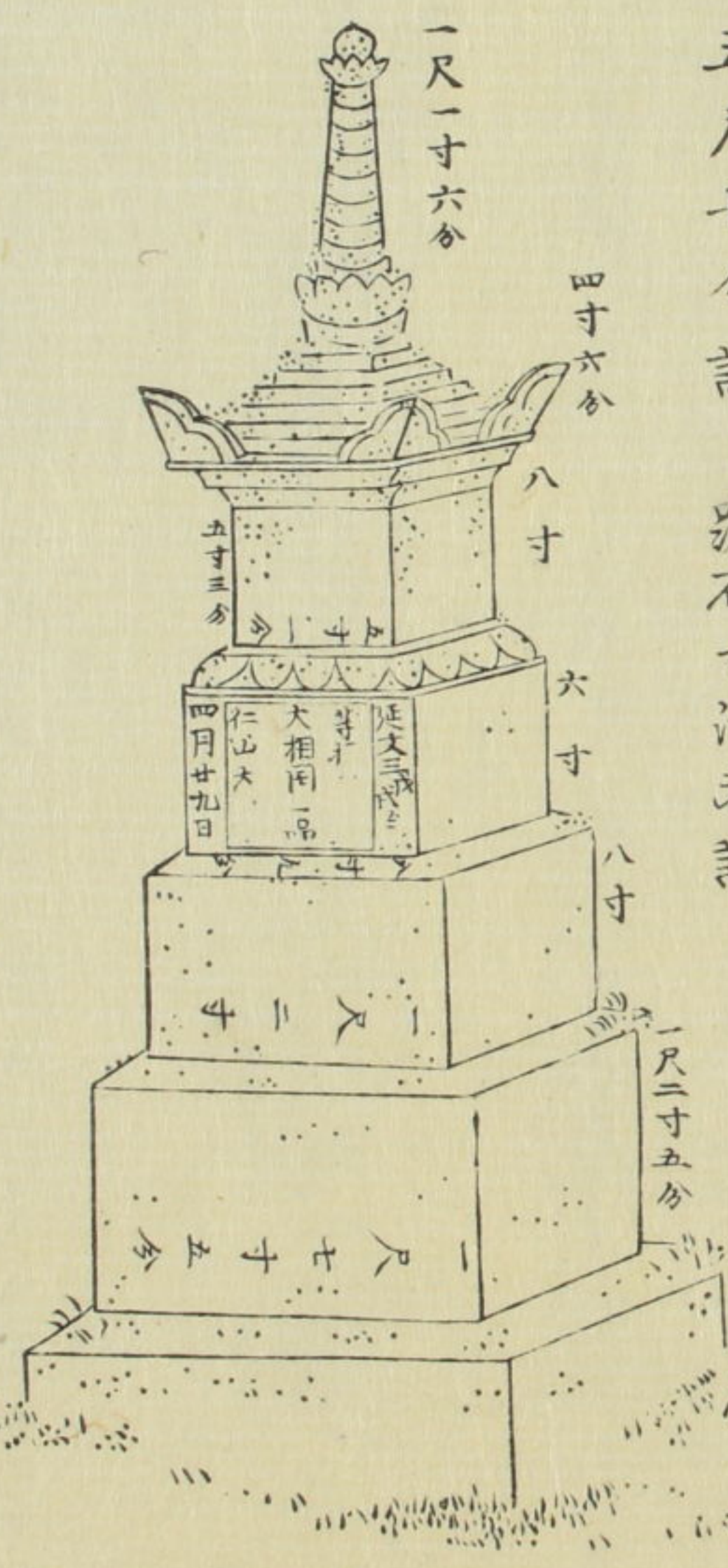
長時氏を援け官軍不加たり父を討んと擬せらるる不
高經極井直常北國乃勢を以くあも不應けり其勢既
不強大あり義詮朝長を搦列し下して時氏を押し至將軍
北國の敵を追討せらるるとせし直冬猛勢あり押寄せ
ハ將軍もまた後光嚴院を奉く迎に國武佐寺へ落し入時
氏直冬系より入けりしと由山崎ふり義詮朝長嵐ふり仁木頼
章東ふりハ將軍陣をより道を差塞りせり兵糧の路絶
けり直冬朝長より時氏を終り叶て入都を落失り將軍
をかより都へ還入く之桑坊門高倉乃御所不入所を留
て同十三年 延文三年 二月癩を病を治しけり廿九日と云ふ
薨せり也けり行年五十に衣笠山の藪に葬め寺持院仁ふ

妙義大居士と稱す鎌倉みくろの長壽寺殿とせしむ 同六月二日左大臣従一位を贈らばけり薨後二十三日め 康正三年四月廿八日百回遠忌の時太政大臣を贈らばけり

山城國葛野郡衣笠山等持院客殿の後小尊氏公乃寶塔あり銘文子等持院殿贈大相國一品仁山大居士延文三戊戌年四月廿九日と記さる 康正三年四月贈寢ありける後東山義政公乃建させし人ところなりと云物換星後呈て今も跌宕半ハ地に入苔藓厚く封し剥蝕文字滅せんと以主田若千ありと云とも香華主なくとく薫誦まき疎畧あるり也爰小其法量を細記し詣拜を教とを得ざる人ふ示志く共小英風を歎し貞儉素と瞻仰せしむ

等持院將軍家尊氏寶塔

總高五尺七分許 跌宕寸法未詳



信元敬寫

高野山金剛三昧院小尊氏卿靈夢を感せらるる有く南無釋迦仏全身舍利の字を一首乃頭小置公家武家廿八人百廿枚乃短冊を勧進し納めらるるあり 康永三年十月後左兵衛督兼相摸守源朝長直義 其内尊氏卿の詠歌十三首あり今之首を録以

か 難波津の江乃波も長閑ふく今春へと霞立ち尊氏
里 靈山よりとて正法乃有乃余利の佛乃姿あけり全
む 急雨乃音羽乃山のふとて以鳴へ春のまがはさうけりおあぐ
風雅集 梅をよそ侍里ける前大納言尊氏
軒乃梅ハ子枕迎くふゆの形窓乃ひまらふ秋木の葉を
喚子音を

人もかき深ふ乃奥のふとて冬はく考かゝ誰かあゝ
公 秋 籬薄を

公 賀建武元年中致み竹有佳色と云ことを講せられり
百及やおひそし竹乃数こふやうぬちよ乃色を見えけり

公 賀建武元年中致み竹有佳色と云ことを講せられり
月十二日大内裏造管乃事始あつて三月九日家康致り
安鎮法を繕とると云中致御會の二年正月十二日と云
公 賀建武元年中致み竹有佳色と云ことを講せられり
同 旅 世中さうく侍里ける處三草乃公を己城まで大藏谷
と云ことを講せられり
今むる方ハ明石乃浦かうりやう晴やらぬ我おひひか
新子載集貞永二年百首歌めり時等持院贈在太長
公 賀建武二年門裏子育致乃折しも東より侍けり
賜 たりと詠くまける秋の氷 相模次郎征伐了下向
あつける時と云り

流石紅葉かゝり氷るらん
今續後撰集奉亮乃本を傳へり
贈り侍り包紙入書付侍り
前大納言為定り云

玉由光るへとく古乃後
續後撰集ハ為家卿乃撰あり
乃駁ふく為家卿の志願あり
返一與えら新郷の故了古の
るへ一時時為郷の返一羽
るへ玉の老里をそ
るると全集りのとたり

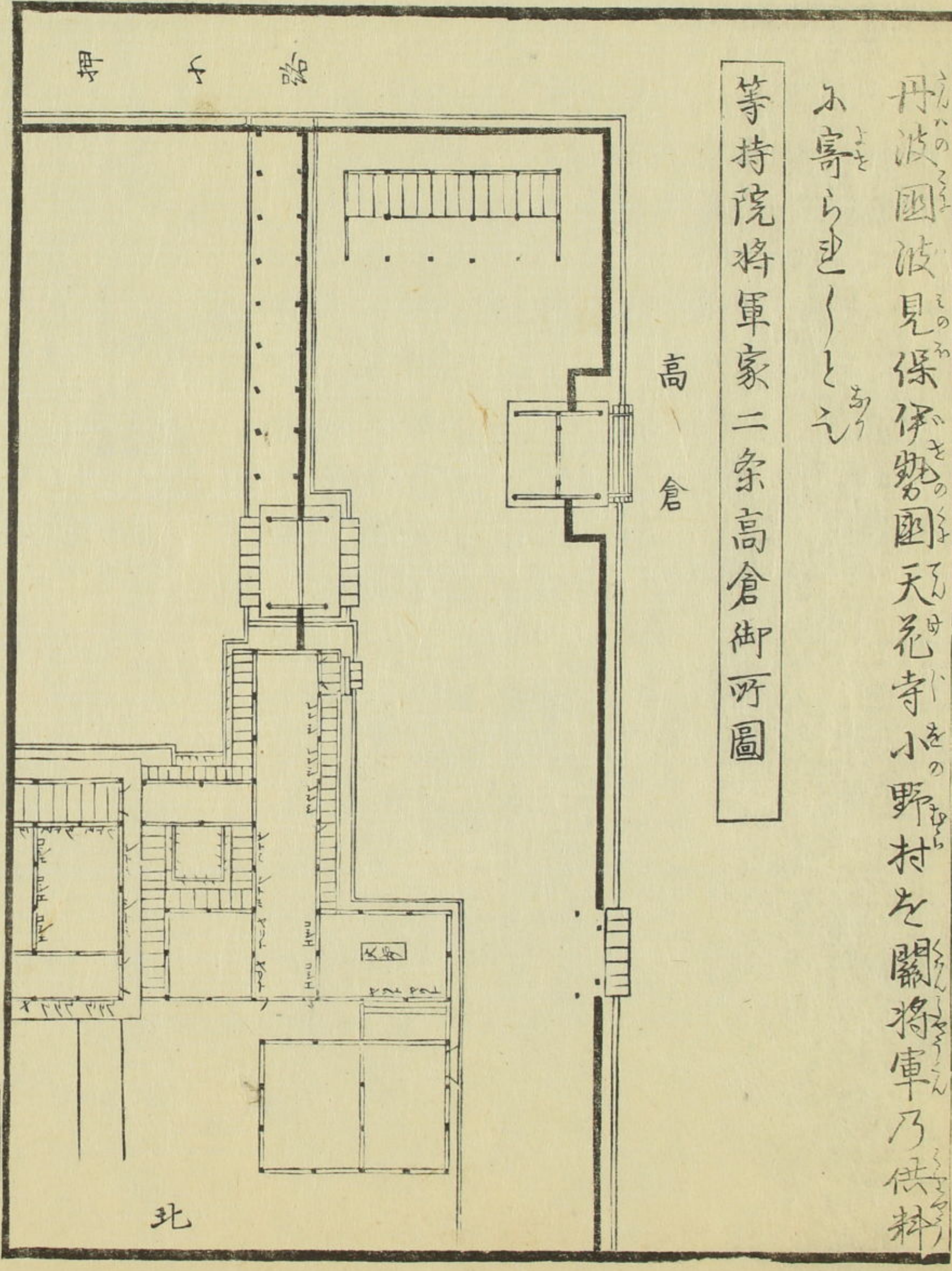
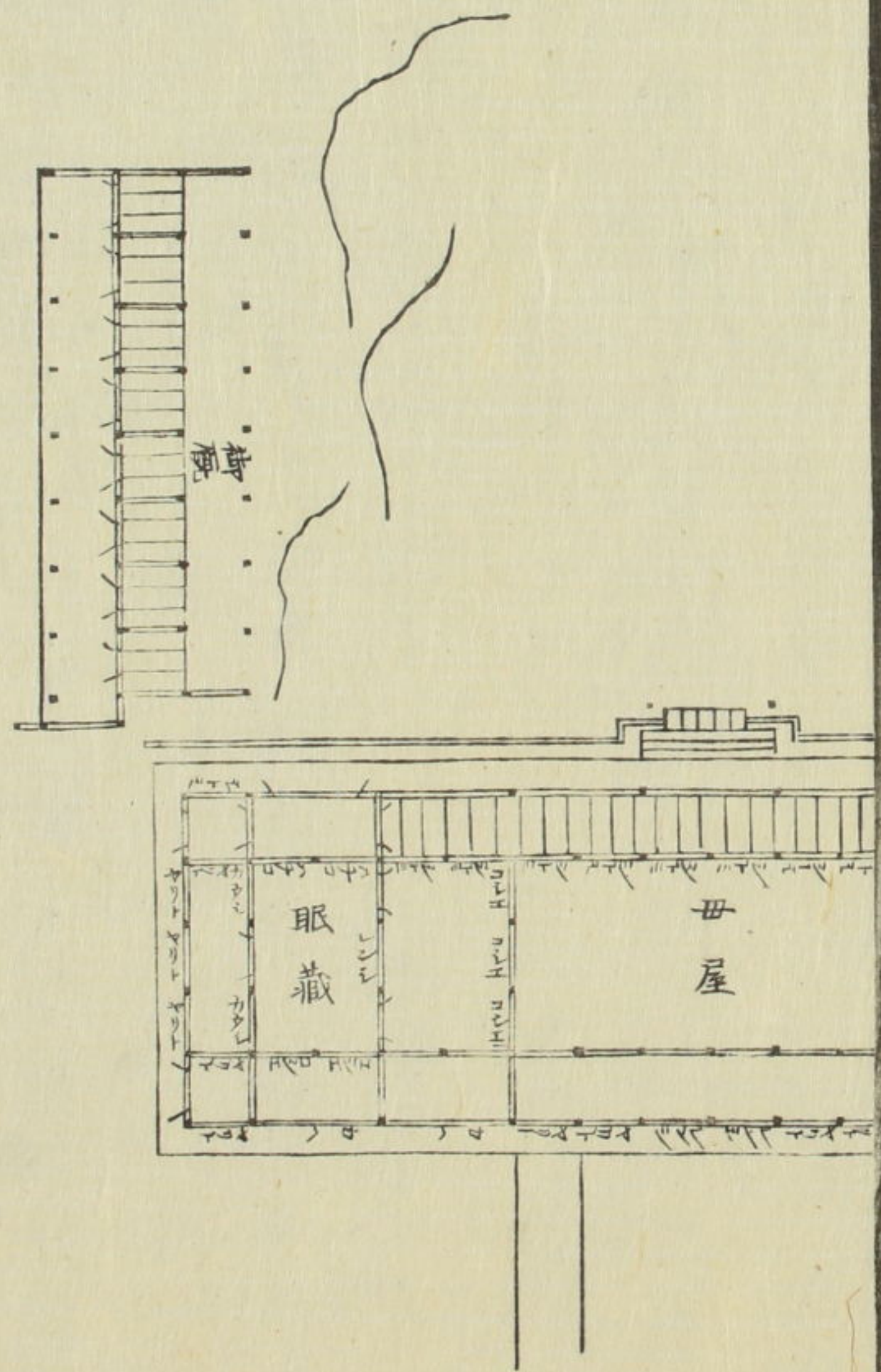
山城國愛宕郡芝薬師縁起
来告く云今決了百戦百勝乃術を教せん
神を求く依仰を登くと靈爰の如く元朝了求むる
王國羽將軍の像を傍らる尊氏郷代寺乃傍らる安

給人と見そく芝薬師ハもめ大官乃西五辻の南
去ら後ハ京極一条小後と也今を吉田山乃東真如堂の
傍小後る靈芝山大興寺あり本堂の脇關羽乃
像あり大興寺宝永五年京師災後不吉た神樂岡の東
此ハ元禄十年乃就圖野永二年の各漢壽亭侯乃印を
勝志ハ志田乃東と有ハか里漢壽亭侯乃印を
藏む寺の西隣に泉武部の部と云東北院ハ大興
印あり關羽ハ蓋寇將軍漢壽亭侯たり漢建安廿二
年孫權と戦く克之に死す日本神功皇太后十九年小
廿四年宋大中祥符七年小至皇神靈を現く云入り
祠を三々あを祀るとか也
くハ尊氏郷代乃祀ら也一始ありへ

西出ハ元乃文
宋の時ハ

長城三ノ内ノ中ノ
ノ内ノ中ノ

山城國葛野郡其院藏尊重ハ御室候人と云海人藻茶
 奥書小長京二年三月十六日書功佐首重廿七真俗交談記の
 奥小依敷寄志新有奉付與尊重律師了于時文月十七年
 日實教ふくまゝたる人かゝつ



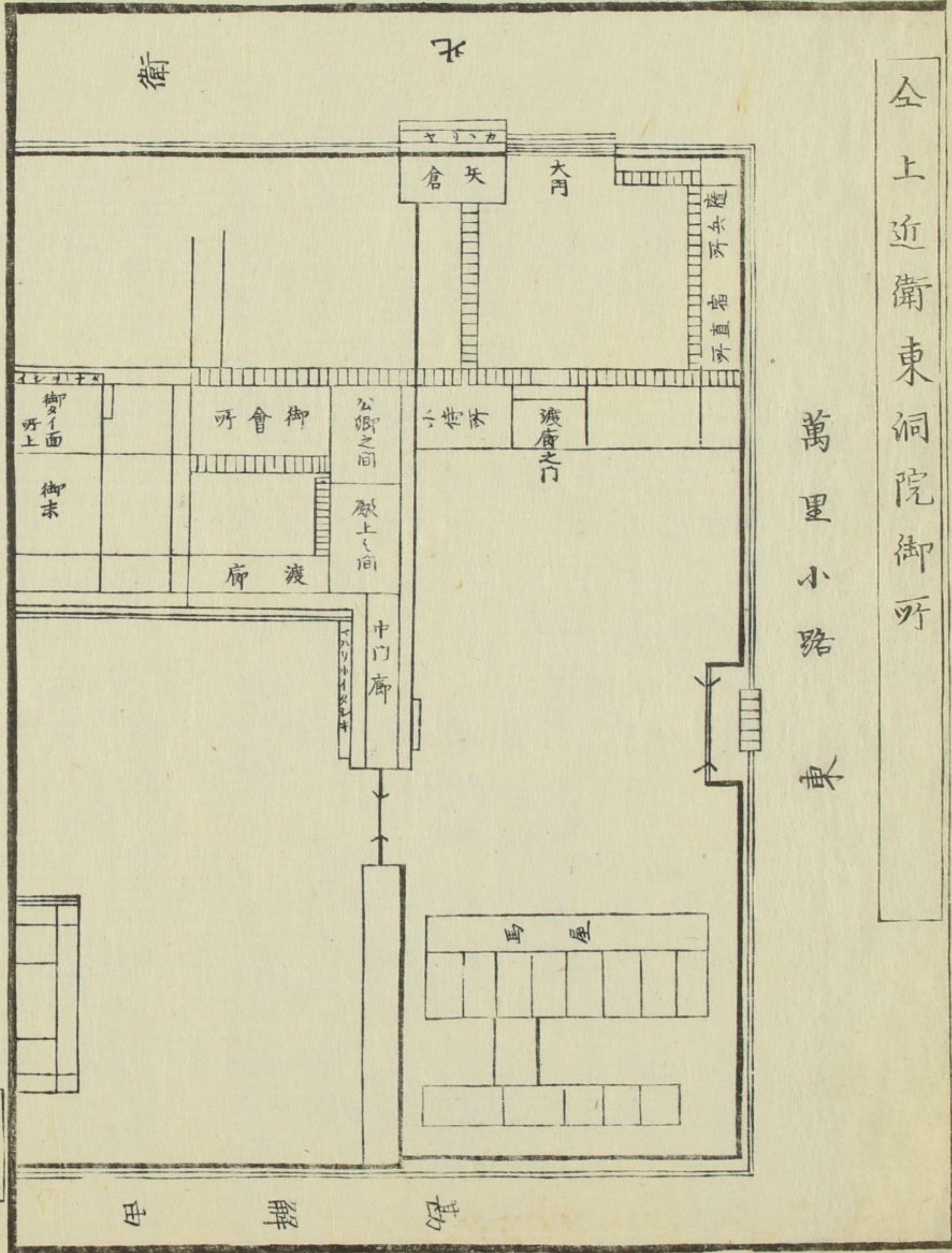
丹波國波見保伊勢國天竺寺小野村を關將軍乃供料
 小寄らまゝと云
 等持院將軍家二条高倉御所圖

尊氏卿元弘三年五月十六日入洛
八月二日相摸二郎時約追討乃ため関東へ首途を移入を
女八箇月乃る御座あり
小器乃西二条の南押小路乃北
たに百に十坪餘の地
心了對る七尺を由と云ハ
余ありハ十六帳敷討乃處と
しは住を同年十一月尊氏卿鎌倉
よ是を誅戮せり
御所小東く中門乃柱を切
二年正月十日細川定禪り放火
ハ八月十一日尊氏卿入洛あり
應永寛奉乃京圖
高倉乃東萬里
今の地面
蔵の廣さ
此の時
謀及乃
節度使
太平記了
御所焼た
東寺を以

本陣とあささたり
五月廿九日入洛乃時ハ
長親卿乃亭を以御所と
乃同去乃處了
十月十日貞和
御門高倉御所了移らせ
同月十五日より觀應元年十月十三日
と教向あると
月廿二日乃曉氏御所乃寢殿燒亡
岡より上洛有る
給ひく土御門高倉御所を造營あり
後皇住せら
九月
九列へ
東洞院
院右大將
十月十日
天皇
御所
入洛あり
貞和
御門高倉御所
燒亡あり
西園乃凶徒
二年二
同

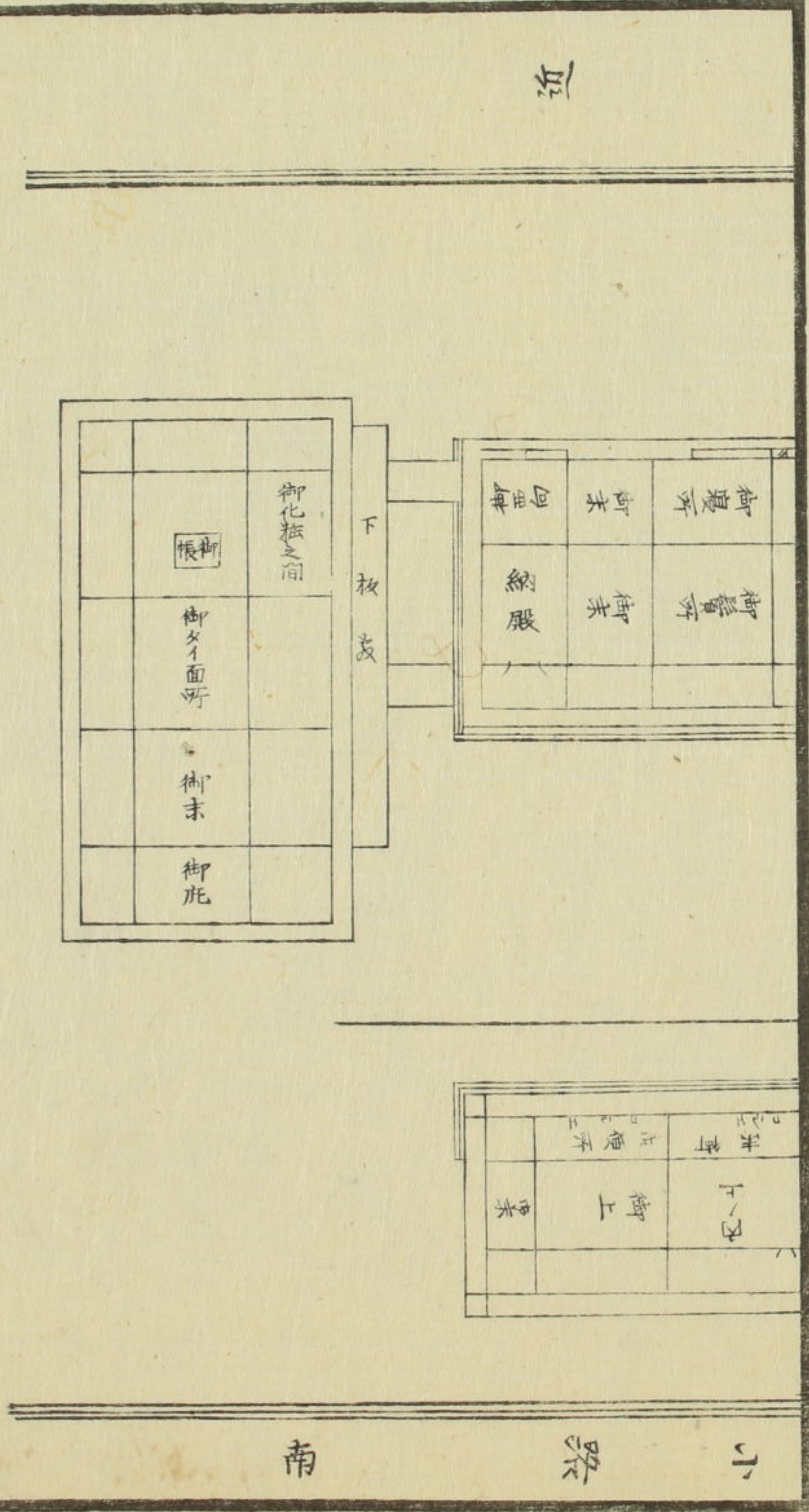
全上近衛東洞院御所

萬里小路 東



八ノ廿九

近



等持院殿近衛東洞院御所

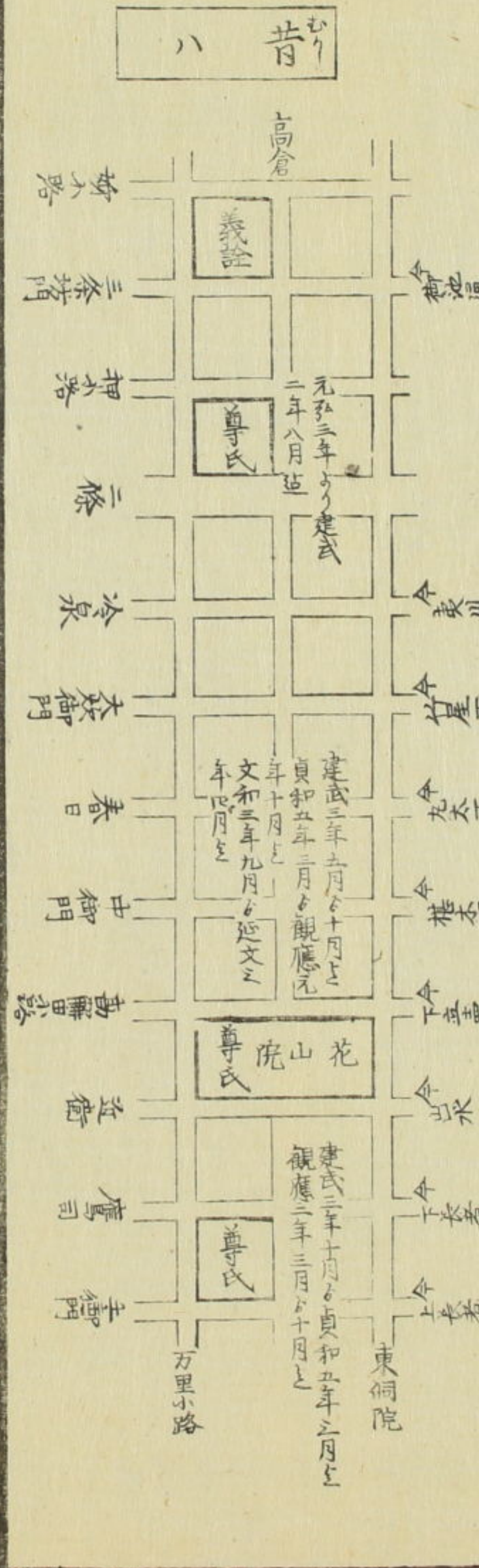
戸部侍郎藤原

此圖一本ヲ花山院圖ト記シ花山院即等持院將軍御所
 此の圖一本ヲ花山院圖ト記シ花山院即等持院將軍御所
 かまの異と為ル是ら以申次記小御便所御對面所御次之間

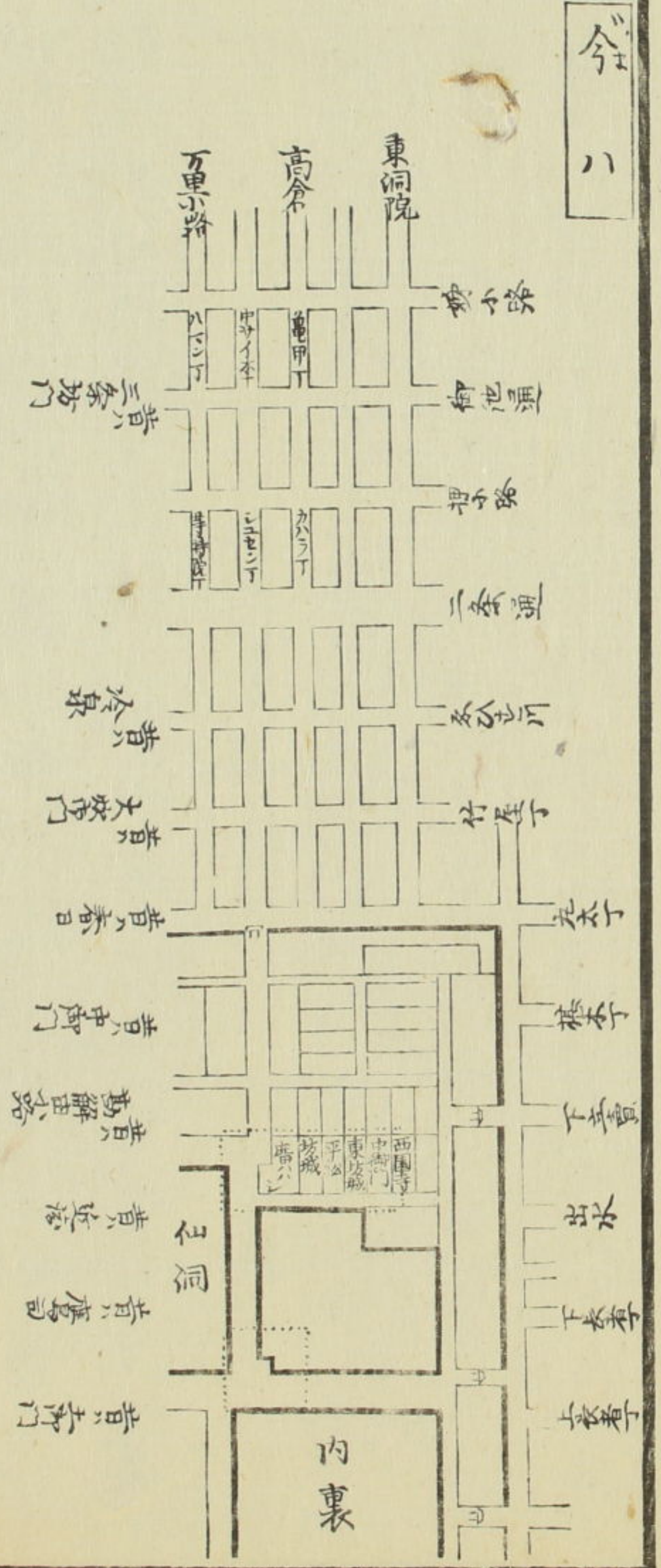
上様御末の御末の御末
 東乃服戸の御末の御末
 年十月十日日直義朝臣録倉

みく將軍小背をけるを討平けらるんため進發ありく文
 和二年より鎌倉より同九月廿一日御所へ還御

す海へ延文二年四月北處ありて薨すと云はる
 亭の二系坊門高倉を建て將軍の近衛東洞院と南北八町
 を隔て大里蓋當時貴顯乃人々多し父は別々住居へ里
 平相國清盛公西八系に住むは小松内府重盛公刺入
 乃小松殿了住む人々如西八系と小松殿との位を考へて
 を隔て大里蓋當時貴顯乃人々多し父は別々住居へ里



今ハ



右小圖をみるに一題京都將軍家最初乃御所あり其禮式
 小赤御所ありて定めらるるを鎌倉御所の殿故とく大坪道
 禪乃伊勢照禪傳を傳ふ處あり余意ありて等の古園を寫得
 高を慕人情を免いたし故に冗長を顧み以昔今の沿革を
 記す抑尊氏卿建武二年十一月廿七日從二位征東將
 軍兼武藏守乃官爵を止め追討乃宣旨を下りて後
 ハ勅勅乃叛臣か皇然と東國其指揮を守り九列爰

了率服一百万乃衆と擁一々天子を挾制一八荒を乃武
威を仰く一何々也竊ふ其張奉を考入るる承久兵亂の
後順徳院乃御讓を受嗣せらるる懐成親王を義時乃計
と御位を廢し奉る九條乃廢帝と一以
歳ふく踐祚七十八日一々九條院へ御後皇有る種乃神
器をハ開院乃内裏了棄置せらるる一と神皇正統記了見たり
文曆元年八月廿日御歳十七ふく崩御せ
み判帝と一と皇統乃廢ふ入たふつら
羽院土御門院順徳院乃御脉からぬ宮ふと尋まらるる高
倉院弟二皇子二品守貞親王と一ハ安徳天皇乃弟
宮ふす海とと云とハ後白河法皇
御祖父乃清心了叶を
玉と一として打簀らるる近頃入道了
行助持明院の宮と中
なる皇子とを然るへれと定めた也と一ハ入道親王不御坐

ハ其御子茂仁親王と一十歳ふあをを御位ふ付する
さよハ八十五代乃皇統を承續せよ入と云とハ萬機ハ一ハ
義時乃掌上了決たり然る不御年廿一歳乃時御位を二
歳乃皇太子ふ御讓あうる冷泉富小路殿了後らるる後
堀川院是あり皇太子と一ハ仁治三年十二歳ふて崩御有
けふ四條院乃御事あり四條院崩御の後ハ九條廢帝の弟
宮忠成王と一土御門院乃皇子邦仁親王と一ハ西宮よ星
外皇胤乃むも海とぬふより北条泰時了意ある一ハ邦仁親王
を御位了居るる後嵯峨院あせありつらま一後ハ天下の成
敗ハ海乃法度とぬく武家より是を沙汰了ゆ入り救了
所ハ地頭了よく志了領家の弱く國了の守護重了

國司ハ輕ク以て以て朝廷ハ日々衰へ或は十年々ハ
繁昌也蓋一朝一夕乃三ふあは承久より以降百餘年
十代乃天子神器を擽く武家乃供給を待せらる九代
乃權臣國柄を專ふく威福を逞く以て後醍醐天
皇承久乃衣襟を休め朝儀乃陵遲を興せしむ大寶判
令乃始り復せしんと有るあり今ま地頭と稱して所
小臂を綴り甲乙人等忽ち白丁列し郡司郡領主の類
の門外手を束ね守護と稱し國威を振ひ大衆
田至有任無任乃班子就く成功揚名乃徳と伍を同く
せらせんとせしむ憤り父祖相承乃武威を慕り數百年
中絶乃公儀子服せざる故也ハ尊氏卿ハ天授人
八ノ四十五

與乃真の大將軍ハ御座かり設令建武乃初政天下ハ
仍も色諸國乃兵士を休め農業を勸め東化乃業を
起させたらんハ累代勲功乃武士譜代乃義乃各譽徳子
かましく以て分給乃白丁と伍を同くせしむ將軍若
果斷英烈不頼く七徳ヲ傳ふ武ハ七長不輝く之尺の
秋西相日々ハ光を増時とかせ教を也
尊氏卿建武二年八月廿九日より勅許かき不自征夷
大將軍と稱せらせしむと將軍家政所を建らるるハ
及て以て依り別當令知家事案主等を任せらせしむ執
事政所問注所等を置也ハ乃同年十一月廿七日官爵
を削らせし後延元元年十一月廿五日光明院乃宣旨ハ

鎌倉右大将頼朝御前
 右衛門督 兼倉右大将頼朝御前
 直子権大納言 任せらるる
 後百口十七年中 任せらるる
 因三年八月十一日 正二位
 子叙征夷大將軍 補せらるる
 御書乃式せへく
 鎌倉乃式と同し 建武三年十月七日 後醍醐天皇
 等持院將軍家御書

元弘以来 被收公卿寺領
 并為知行地事 為元弘不
 可有相違之状 如件

公卿寺領 鎌倉右大将頼朝御前
 後醍醐天皇 隱岐國
 下乃政務公家一統
 不歸一諸家乃領地

建武三年十月七日
 妙法寺長老
 將軍家政所下 常陸國村田下庄
 補任地頭職事 左衛門尉藤原朝政
 將軍家政所下 常陸國村田下庄
 補任地頭職事 左衛門尉藤原朝政
 將軍家政所下 常陸國村田下庄
 補任地頭職事 左衛門尉藤原朝政

將軍家政所下 常陸國村田下庄
 補任地頭職事 左衛門尉藤原朝政
 將軍家政所下 常陸國村田下庄
 補任地頭職事 左衛門尉藤原朝政

右去壽永二年三郎先生義廣發謀叛企圖亂爰朝
改偏仰朝威獨欲相禦即待具官軍同年二月廿三日
於下野國野木官邊合刻之刻抽軍功畢仍彼時所
補任地頭職也庄官宜承知不可違失之狀所仰如件
以下

建久三年九月十二日

案主藤井

知家事廣

令民部少丞藤原

別當前因幡守中原朝臣

下總守源朝臣

等の署のふ
まゝ後廢
備のく一常
亂の分ふ於
るハ別子御
判を副置れ
子後末代乃
龜鏡とある
へき中下後
とありく將
軍家政所と

云文字乃右乃方へ御判を載らると云
書み直判あらぬを嫌ふと云ふも實ハ頼朝卿より常
へ直冠ふあらぬを憤りかくハ云ふふハ一語ハ
氏卿ハ當時乃勢家司乃奉る下文但氏二通を
みくハハ望ふいふとぬ處前ハある
見く頼朝卿乃將軍家政所を用ひしと尊氏卿乃將
軍家政所を置させると御下文と御書と互ふ其時勢
を窺ひ知へる形
頼朝卿ハ六孫王經基朝臣ハ代乃總領と
大將を兼ふと云ふも坂東乃各家或ハ匹敵乃恩をかきり尊氏
卿ハハ幡太郎十代の孫ハ一六孫王ハハ十四代ハ里然ハ義祖
上総介義兼ハ文治ハ人受領乃列くハ山名伊豆守義範ハ賀美信
濃守遠光ハ安田越後守義資ハ賀相摸守惟義ハ伊豫守義經ハ同班
七代乃間位田品を越えハ尊氏卿ハ且
勅勅解官乃御身朝敵乃各を蒙りふハ
尊氏卿御母方叔父了日静上人とハ上杉頼重乃末子ハ
了後三位清子尊氏卿乃弟あり頼重足利治部大輔頼

氏乃妹了嫁了永仁六年駿河國蘆原郡賀島郷乃家
 了生里 賀島頼母難産了了死た也いあさる 冥福を薦
 めんた先同郡等覺寺の日位上人を呼了了備不成た
 了日位上人の弟蓮後小日朗上人乃弟子日印上人
 了上人乃弟子あり 後ひく本化正宗に代乃法燈を帝都不耀了むひけ
 時了了將軍末法万年掄使乃本誓を憑よ建武三年
 十一月廿六日不見安藝美作三ヶ國乃内二十二庄乃地
 頭小課さく六条堀川了本國寺を造營せらさるり 繩墨
 了了と云とも天下の
 争亂いすく静まらに
 大木乃功おひの外了

寄附

石見國永之郷 小石見郷 津毛郷
 正覺齋 福屋郷 久利郷

王者へ寄附ありし永代寄附乃於た多るへ續日本紀天
 平十年二月乃條了五年を限里食封百戸を觀世音寺
 代等のこと文去がれり 將軍解官乃後たるが源朝辰
 と書也あり 鎌倉時戒制乃寄附状了冬源朝辰と
 あるの建武二年三月廿八日ありと本官

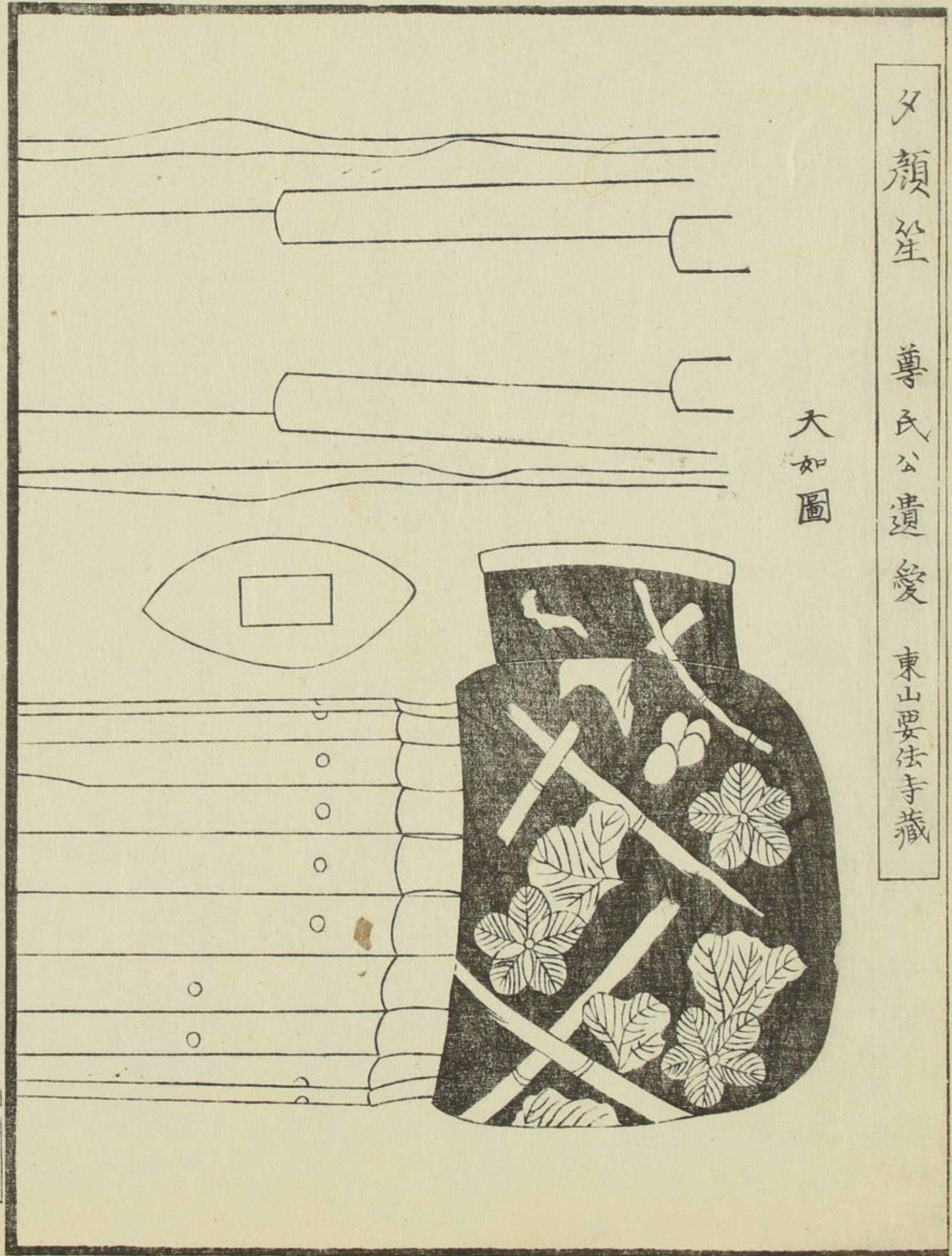
用田郷 太田南方 上若羽郷
 下若羽郷
 安藝國吉茂郷 久芳保 下品地郷
 志波庄 志芳庄 能見庄
 秋光保 多治保 大朝庄
 那戸郷
 美作國青柳庄 粟倉庄
 以上武振式之所
 右當寺造營之間奉寄之状附件
 建武三年十一月廿日源朝辰



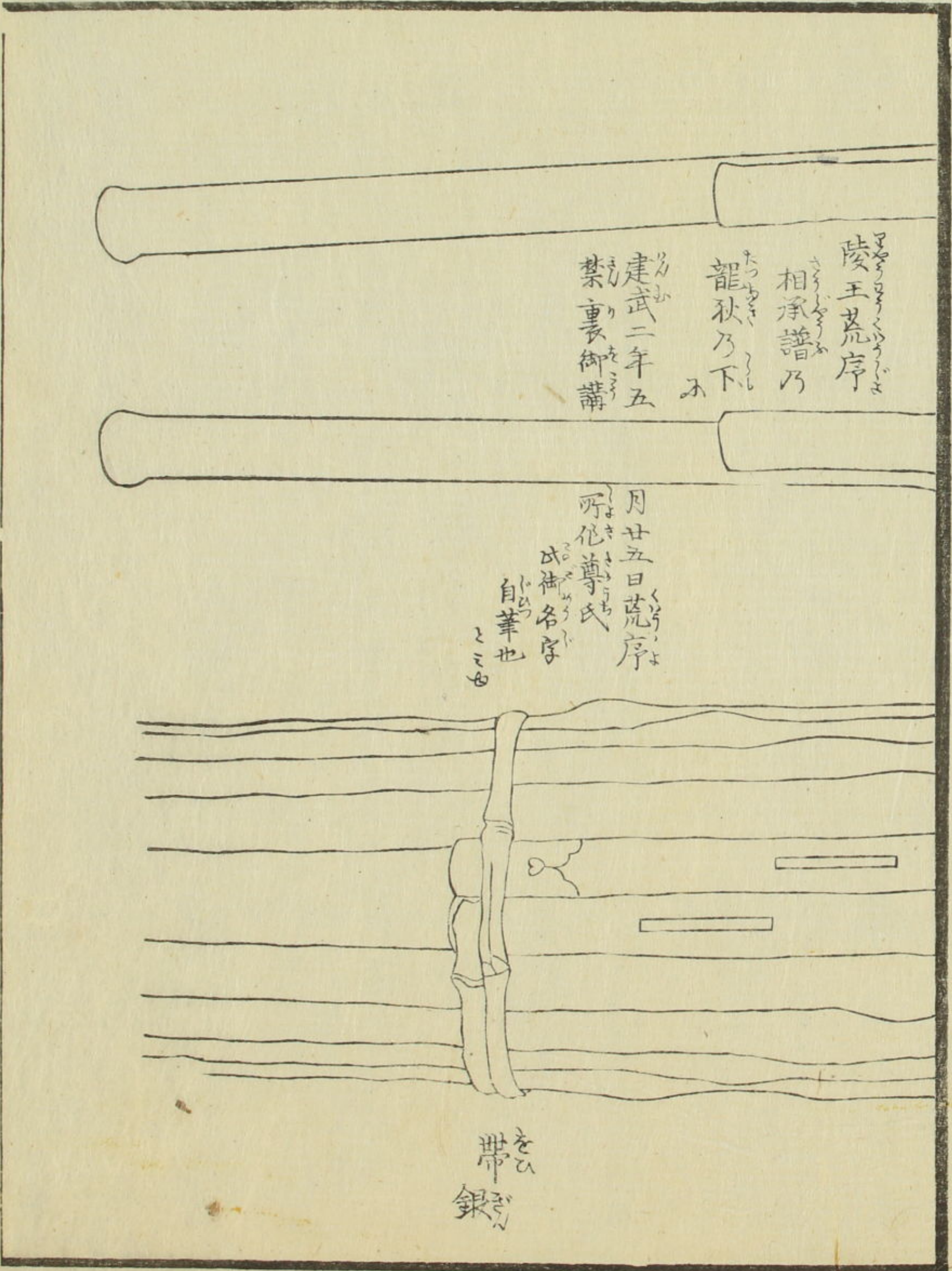
延引了十年乃春秋
 を經了貞和元年の
 至里結搦事終け也
 廿二庄の元乃如く
 將軍家乃領とかな
 里 寺院了永代を限り
 了 兼限を定めし
 入 了 了 了 了 了 了
 津乃田園十八万六
 子八百九十代を天

夕顔笙 尊氏公遺愛 東山要法寺藏

大如圖



八ノ四十六



陵王荒序
 相承譜乃
 龍秋乃下
 建武二年五
 禁裏御講

月廿五日荒序
 所化尊氏
 成徳名字
 自筆也
 二七

帯
 銀

御下文と云名目止らさるるは依竹文書
 小佐竹上総介貞義入道道源乃子息依竹八郎義直建武
 二年七月廿二日武藏國鶴見原合戦討死同六郎義冬
 建武三年二月六日常陸國久慈郡みく楠正成乃代官殊
 伐乃時討死さるより同四年三月父上総入道乃陸奥國
 雅樂左の地頭職を賜ふ此時尊氏卿光明院乃宣旨ふ
 依る權大納言
 任る後へは弘安
 禮節ふ納言より
 六位諸大夫へ二
 合とあるは從之れ

可令早領知陸奥國雅樂左
地頭職事

右為子息等付死に賞所先給に早領先
例可致伊法之狀如件

建武四年二月廿日
依竹上総入道

たかかえへは是を
 御下文と唱へて
 比時陸奥國乃
 管領足利式部大
 輔兼頼初年たる

依竹上総入道源代官之狀依竹執事如件建
 武四年二月廿六日少輔入道教武藏守とあるは
 考へし書札乃武法權委しく
 別書ありしを思ふ

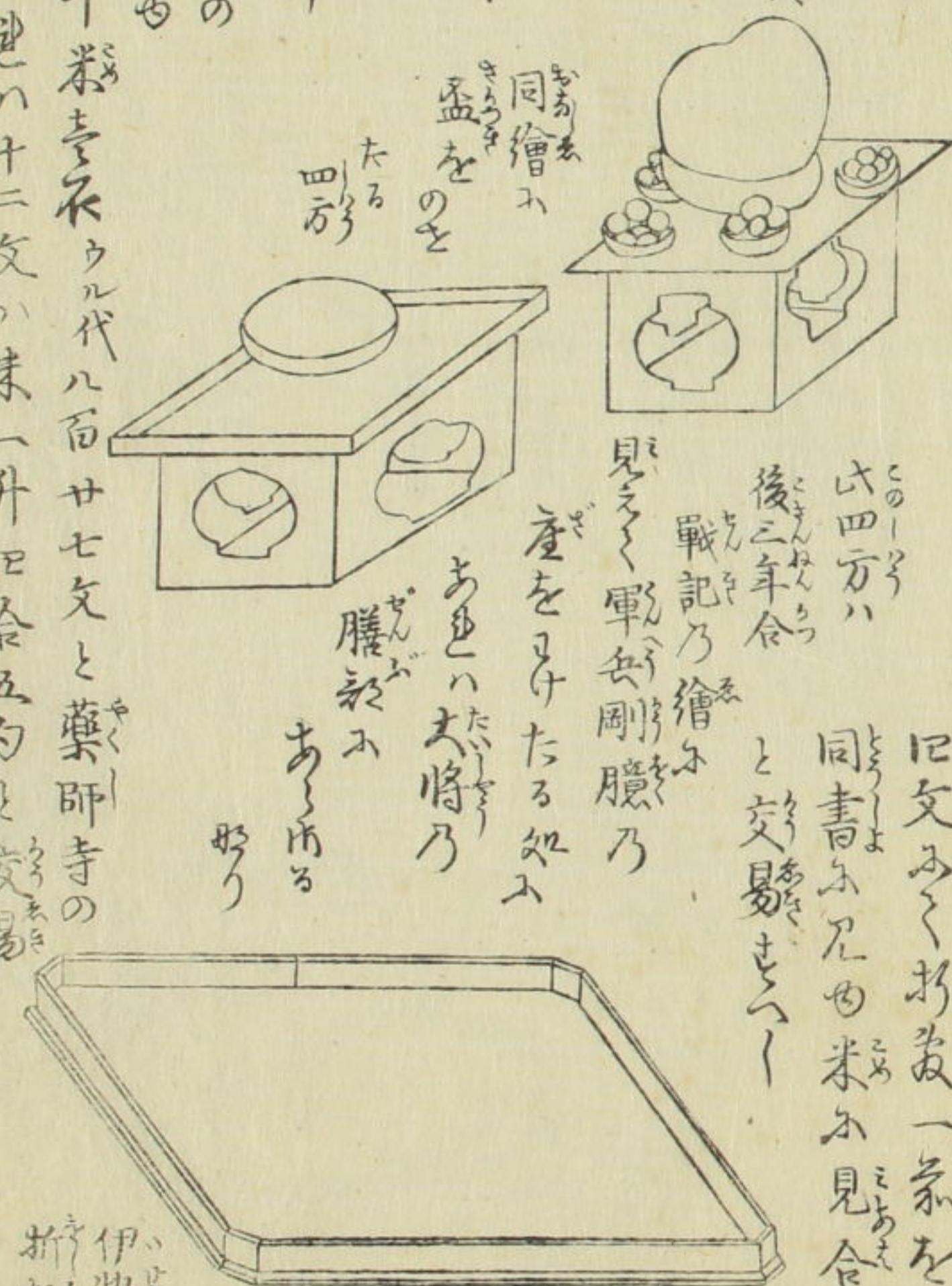
尊氏卿延元元年春筑紫へ御下向ありし時多々良濱に
 て供御を調進せんと伊勢守貞継入道照禪をこら
 奔走せしむるに不之許春たふ八木を求出し飲了飲を
 御四方に前薄ありし女技御手飯匙一川白著七茶赤
 著世茶昆布二そと番乃ま先一袋鯉乃けつり物もりめ
 乃削り物鯉節うち味噌塩鯛一かけ干鯛一枚を長横
 へ入る伊勢乃下致と御内乃下致と二人しり昇るあり
 てありしとありはる小程かく軍志きり小膳ふ乃里遂
 小京都へ還御ありし天下乃武將とありをひひの建武
 四年乃春若狭國小黒飯と云地を照祿符領せしと形
 是より京都將軍家乃所裁例しり毎月朔日ありし小沙

誕生日ふのありし調進をさるるありしとあり

四方

薄れし

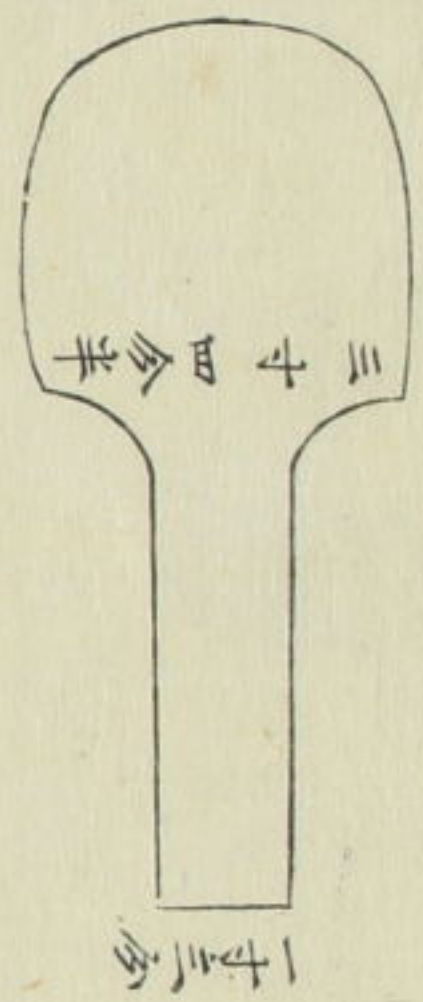
浅深了より幼少より公家なりし四方を用ひらるるに
 天正頃乃定め
 とありし
 多々良濱
 ありし例
 として
 年中十二
 銭けり
 四方一茶
 調進せし
 伊勢貞助の
 記に見ゆ
 延治三年
 記に見ゆ
 延治三年
 記に見ゆ



伊勢貞助の
 記に見ゆ
 延治三年
 記に見ゆ

手飯匙 飯鉢

長八寸二分



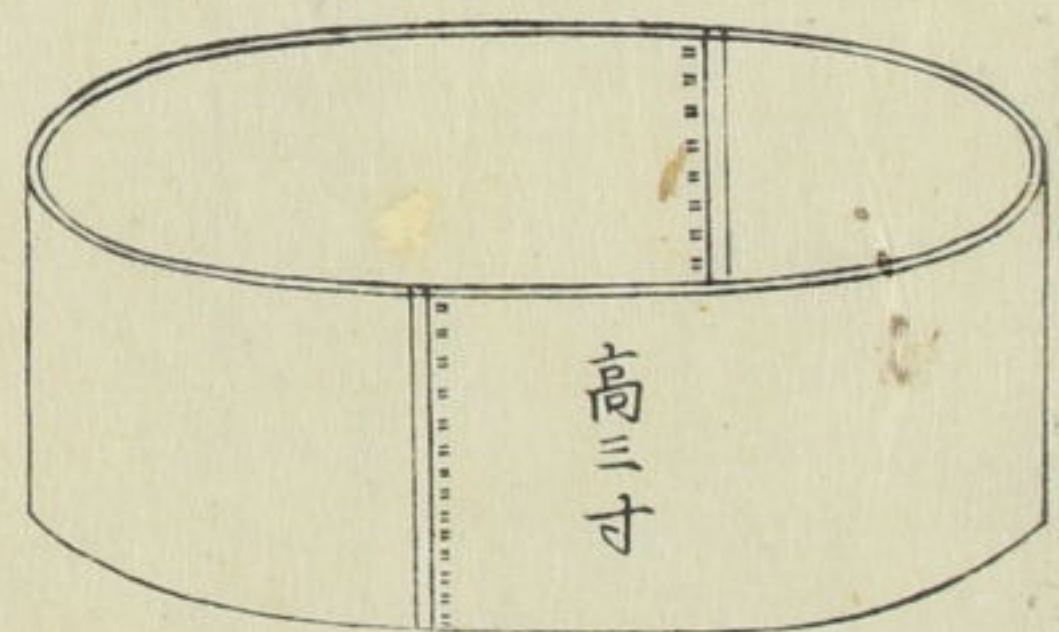
ほぎ板ふくけづる

箸 揚枝

長七寸二分



楊枝長一寸二分



此祝乃ち乃ち大キサ口の廣き九寸六分
外の呈 け類二の
小ちの大きは
口の廣き
六寸八分
二寸一分

右多々良濱
あく乃御器乃
寸法伊勢貞助
乃記不見る

七条のありり上下あく二の
世条の松木い
あ乃あくを長横了入くまじあり

御膳長横

蓋裏書

以故太皇太后之御物

充秘密准頂具足

奉資眞福

長承元年壬七月

十六日卯施入

傳燈大法師

念範

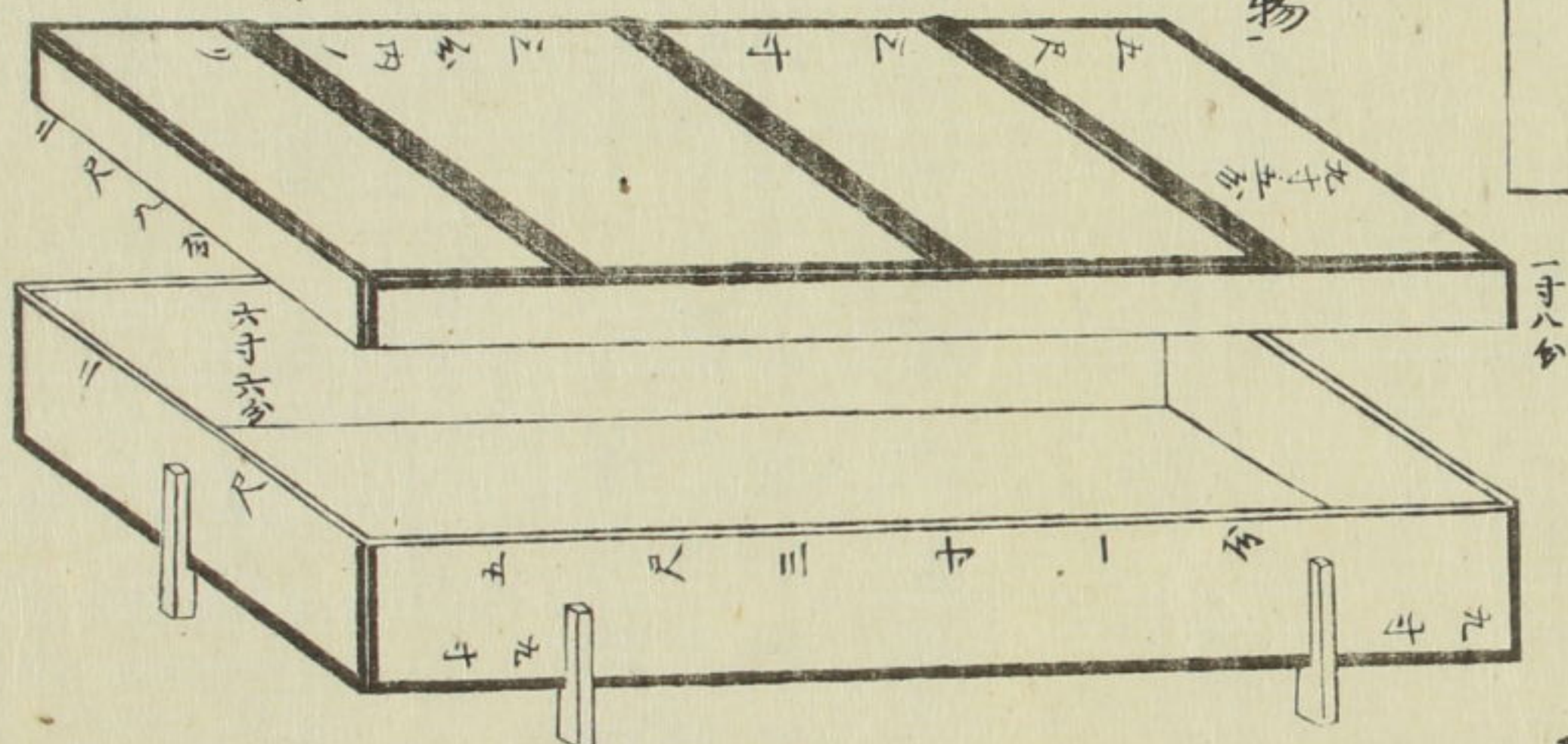
依故大官大進時房

之遺願也

建保二年九月傳領

高山寺

方便智院



多々良濱あく用ひ長横小
びる躰乃物ある一依く柁尾

高山寺小傳とれる宇治皇太后
宮御膳乃長横を圖くその
大概を

伊勢貞助乃記不毎月の
朔日御誕生日西夜つ
調進供御の長横あく

かきく系るむうの大名
元下代傳長横あく下馬
ゆゆと年参とゆ中傳
ゆとあくの光原院將

軍家乃時よく断絶なく終る也一と云うれり
等持院將軍尊氏卿あまた幕府を用り武家乃権柄
を執り入る鎌倉乃右大臣將頼朝卿乃意を平家一門を
と云ふ其時と勢と大り異あはれ其制度よく互に
取捨あり今其大畧を舉る頼朝卿ハ後白河法皇の
院宣に依り木曾義仲朝臣を追討しおく平家一門を
征伐せらるんため諸國乃武士を舉り頼朝卿乃幕府に
入る其指揮に従はしむはるる武士私威を耀し諸莊
園公家乃濫行を致さる土肥二郎實平梶原平三景時
を總追捕使とて上洛せむといひかの國宣園司の下
廳の催禁裏乃を忽緒せされと下知せりるを以て若く

此の國ハ國司を置也庄ハ庄司を置らる一と明
かあり尊氏卿乃自將軍乃權を擅し天子を挾制し
て郡國乃兵權を專し國司と守讓を混へるあはれた
るハ皇朝上古國造と同しく大寶制令改革乃大か否
所か皇去の昔ハ一國乃田皆天子乃有とて是を民ハ班
給ふ不し其身一代了止る身死せぬハ即公了返し納
民田を受るハ租を貢る租を貢せ餘ハ皆民乃得分る
一國乃租を平分し二とあり一を正税といひ一を公解
と云ふ正税ハ天子乃倉廩了納め主税頭大進を掌る公
解ハ國守と介掾目史生乃勤勞分不配當し是を領
つ又民乃年終不依り正丁中男小男を定め人別不物

を出さむ其地不産する物是を調と云又民の戸数
乃多少を計里戸中戸下戸乃別を三物を納るを庸と
云調と庸との主計頭あるを掌る是太寶制令乃時民
み取乃法あり然る民を三分一一分を兵士と云
去く京小宿衛と云邊要了防禦たす一國中不守備
たす一む兵士軍功あるは田を賜是を子孫子傳人
子孫より軍功小依く田を賜是國中兵士乃家ハ富
て農民と自然不懸隔ある所以あり中世より以降朝家
不成功乃科を定めらむは兵士乃富る者財を獻し
て爵を賜是兵士乃衛府乃官を授一椽不任を授者
多し所以あり是兵士乃器量ある者を擇く帥と

か一軍團ふくむ穀と稱一他國より出く征を教とすハ押
領使と云朝廷既了源平両氏を以て將門と定めらむ
去り後諸國乃兵士盡く其幕下了属を即源氏乃家人
平氏乃家人と各黨を建るる至る源氏重代乃兵士と
云代々平氏乃属するを平氏重代乃兵士と云其田緑
ハ面々父祖勲功乃賜田あるは源平両氏乃軍將たる
人乃進退尊氏卿初め國々乃兵士を招く勲功の儀
深を最と譜代累代兵士と云京小宿衛邊要了向ハ
武田を論と以披管たといハ紀清兩黨の宇都宮不於らハ
の類を領る分をいとい郎等其家を云と別くハ高師直
ハ足利家乃郎等の長あり仁木細川ハ一門乃親族あり
高師直関白功を關乃功を以て其ふたち芳賀伊

賀守高名入道禪可ハ宇都宮公綱乃披管たると云共
軍功を以て越後守護職を賜入る如クハ頼朝卿乃意
と大ニ異ホリ北條家乃家人と幕下御家人是よりして
兵士軍務を主ク々々氏族を專トせ久末ホ至ク斯波
乃朝倉織田細川乃三好畠山乃遊佐神保赤松乃浦上
大内乃陶土板乃長尾京極乃上坂浅井土岐乃齋藤等
ニカ列レテ譜代乃名家ト相周旋ト致ス至ル折又兵
權乃一變ホリ其民ホ賦ト致法租調庸ハ禁裏御領及
以仙洞女院宮方乃領入乃之殘里ク其餘ホ全ク守護
職ホ納守護職乃收ト農民乃得分トハ國ノ頃々差等
あ是ハ一定レテ云ト云ト由田地ニ町ニ段乃年貢錢

十貫文了希る地あり後樂寺文書不見也又粗田十石錢十貫文
ノ當ル所あり神鳳抄小見也共了然乎時ハ百貫乃地
小粗田百石を収むハ是を三町ニ段乃法入准まら小
一段ノ粗一石斗餘ホ准一步乃粗ニ合ニ勺餘ノ
又上田ハ一段小粗ニ石六斗より石六斗及人錢ホ准折
と連ハ九百文より一貫文ノ當ると知ハ此田得を五
十分ホ一一分を割ク武家役ト名付京ホ運上と
なりたとハハ百貫文乃地頭より二貫文を鎌倉乃定ハ
守護乃給分段別五升ホ一々權門勢家乃莊園を以
去ハ豊後守護職大友式部大輔頼泰入道道忍ヲ注進
小田代六ノ八百七十三町とあるハ公田府田神領佛

寺領等を該載たり。然し粟三千石百三十六石五斗
今乃之より二百九十石を守護給とかん。是弘安八年尊氏卿
九石。四升あり。乃時了大友式部近氏泰頼泰相襲る守護職たる時
ハ六石八百七十二町乃田を錢了平均し。凡五万七
千百十四貫六百三十文。ふ當るとあり。是を五十石ふ
割る。一分ハ千石に十二貫二百九十二文六分。ふ准む
粟ふ。之ハ四千石。六百六十九石。一斗七升。ハ白く。當る鎌倉
の時乃守護給たり。増一と千石。と十二石。六斗七升。餘
即運上。し。將軍家乃府ふ納り。其次ふ公家神佛寺の
領家。ふ。改弁し。其餘ハ守護乃有と為と云ハ。圖田帳。是
利家乃賦法ハ鎌倉より酷。う。う。と推量る。へ。一
貞和八年六月十一日。祇園執事行意。曰。桑乃橋を渡さ

む。く。新座本座乃田樂を合と老若。公。能。競。を。せ
さ。勢。ける。曰。桑。河。原。ふ。棧。敷。を。打。奔。代。乃。見。物。ふ。ふ。愈。し。と
く。公。家。ふ。は。二。系。關。白。良。基。門。跡。ハ。梶。井。二。品。尊。胤。法。親
王。武。家。ふ。ハ。大。樹。尊。氏。あ。せ。を。興。せ。ら。せ。し。か。其。以。下。乃
人。く。其。中。ふ。及。む。人。と。本。年。記。了。見。え。く。く。去。也。將軍乃
田樂見物。子。出。御。あり。始。ふ。不。登。相。摸。入。道。崇。鑑。ハ
職。ふ。里。然。也。と。小。田。樂。了。耽。ふ。を。刺。る。崇。鑑。ハ。我。察。み。く
是。を。尋。人。獵。人。あ。せ。を。議。を。尊。氏。卿。ハ。身。心。軍。の。上。將。軍
と。し。く。士。庶。と。共。了。棧。敷。其。後。田。樂。法。師。將。軍。御。所。へ
出。仕。を。許。さ。せ。年。々。正月。七日。年。賀。乃。御。禮。を。下。と。云。里
和。泉。國。和。泉。郡。大。津。村。了。藤。田。松。阿。孫。同。清。阿。孫。と。く。二
人。あり。昔。ハ。新。座。本。座。十。三。人。宛。廿。六。人。あり。し。と。云。本
京。今。出。川。室。町。了。泉。原。二。德。紀。列。伊。都。郡。入。江。村。了。坂。本
清。林。同。林。西。同。西。林。と。云。云。人。あり。是。等。田。樂。法。師。あり

巨樂 鶴岡職人盡繪所載



金キ
水干
白
赤
黒
帯
白

うちたぐく
中門は乃

原本圖

よまらふ

依

川をよ

載

鶴岡職人盡歎令乃時代定々
らねとも鎌倉幕府乃末乃物ある



今春日祭ふ出る田樂法師

高足

符衣 緑
あやめ

刀玉

あやめと玉と刀子を
乃と持出す



装束
高足と同一

但能くくをを休せけると云う依り考へる貞和乃
 頃田樂を能と称せしと明けし又其下文小刀玉の道一
 かくく立達後里一か八日吉山王乃示現利生乃新なる
 猿樂を肝了深くそ出しけふとあまは回樂と猿樂と
 相共し伎を施せしと亦疑ふ一其猿樂ハ退發延年
 乃方あまはと太平記に見ゆ也今古寺舊刹小
 現存する延年乃舞と云ふ乃あま回樂猿樂より出しか
 不慮一尺素徑来り本座新座と田樂和列に之猿樂
 各可攝所能と見ゆるも田樂和列共し一節
 せし然也と其淵源本行經乃大蛇と猿と乃喻ふ
 出く猿の狂言しと齡を延た不理を演く智論に意ふ
 方命壽ニ入祭祀祈禱之礼儀を弘めあるへけは
 秋三に不穰災と云ふ是か

延年舞

誦文方

鈍色大五條

中啓

入敷定里

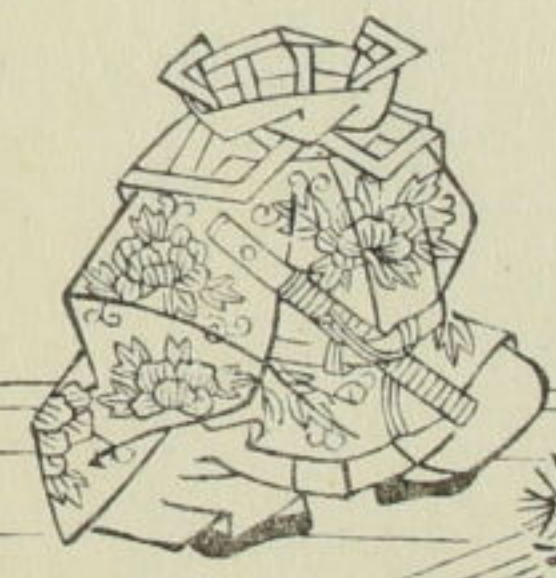
誦文里

南都 京

杵尾 高雄

茅野

異同あり



信北圖

八ノ五十五下

舞人

赤色浮牡丹蔓

織物袍

白大

中啓

白五條

頭をつむ

烏帽子 紐紫

鼻高留

さやま ち
つう 較
めぬき 丸
下緒紫



狂言と云能と云猿樂と云皆祭祀祈禱に用ひらるる
義ありきく獲災乃意を兼ふからん誦文乃終りあは
やふ教神乃んもあひくらひぢやんあひくらくと云歌を三
反お返し返し唱ふとい何方より延年乃舞を傳へる處ハ
皆同一きふや

康永元年二月小笠原信濃前司貞宗信濃守宗一通乃
日安を上く云早武勇稽古たふ了依く大追物乃御制
禁を止らせんと欲せ右貞宗ひをう小前様を考へ情回貫
を案せ教ふ武者主を當の國を安まる基ふく亂を撥
去暴を禁せ教本あり當御代尊氏卿義兵應兵乃旅力
を廻らし興廢絶乃功勲を甄し向ふ處前なく速子

虚實乃氣をきつし戦を以て敵を却け明し奇画乃機
を張る頓ふ九變乃利を通し偏ふ七徳乃款ふ諸を
玉ふと云と云天下歸画乃日元弘三年七月廿六日諸國
武藝を停られたり徳禽獸不及く大追物を禁制せら
る政化乃仁恕を知といはと弓箭を携く武藝乃廢
絶を歎く然ハ禁遏乃制を止めら也御免乃法を下せ
終くけ道乃再興を樂まん私乃爲る中ふあり以て乃爲
ふあ是を中の家乃ためふ中にある道乃を女子あは哉
中とありし不と不將軍其忠云を賞せら也且け禁制ハ
當今北朝朝光明天院御宇○南光ありしめざることあは忽ふ
再興乃議おこあはとと也貞宗乃言上あはく天
追物を金く断絶せしむ

頼経將軍武藏守泰時おあし経時等乃心を盡し藝乃
顯るおあしハおあし
ひ乃おあしハおあし

尊氏卿幕府を開り將軍兵を指揮おあしおあし仁木細川
吉良今川斯波乃一旗を正首とし上杉畠山一名一色

佐々木赤松と順次をるハ其家を賞給し官位乃淺深
おあし以後ハ三職 斯波細川 御相伴元 一色 畠山 赤松

職乃當職ハ國持元 吉良今川 准國持外様元 評定元 御
供元 御部屋元 申次 番頭 節廻元 攻元 走元 總番元 かと

所役を日々たせし猶その家門を用ひらせし也
高氏伊勢氏大高氏等乃おあしハ累代足利家乃郎等職
おあしハ前乃諸家と一列をあしハ 乃傳り快くせり

尊氏卿冬内ノハ衣冠束帶朝家乃曲故り徳い改ら

る不及し人云とハ私第おあしハ正月朔日諸將乃拜賀を
受ら給時ハ唐織乃御服 白御直垂 御腰乃物 御扇子 御

鼻紙 正月廿日 二月朔日より八月朔日 白き絹乃給
八月五日より七月晦日 九月朔日より八月朔日 九月八日

と給九月九日より小徒十月亥の日ハ紫色乃小徒三
月中ハ薄小徒 贈遺ハ豊長太周より紫頂老郎ハ賜り給を

書寫し為ハ朔日ハ儀給ニおあしハ食ハおあしハ裏打
大膳大まてハ也ハ月朔日とあおあしハ思へ

乃御直垂ハ御陣乃時より御衣ハ同正家記 御紋
桐乃紋 總地乃桐を色ハ定まら 尾張國熱田地 藏院
御持馬乃騎あしハ儀乃直垂乃桐紋乃ハ 御兜乃前立

ハ半月形ハ半月の形利利錢錢阿阿寺寺乃乃形形乃乃ありはる劍形劍形を用ひ
らたると云云函函人人某某乃乃と云云正正しく其物其物を之之孫孫へ必定必定不
記記不不之之也也

翰林誦蘆集翰林誦蘆集不不元元弘建弘建武武乃乃間間仁仁山山大相大相云云傳傳氏氏馬馬上上不
く天下天下を取取ああくく吾運吾運を用用はは必必之之寺寺をを立立へへ
と心中心中子子誓誓と色色以以之之とと新造新造いいまま成成ささりり不不とと不不姑姑
寺寺小小從從ふふ文字文字之之川川をを集集めめくく等持等持寺寺をを名名ととおおきき後後て
康永康永之之年年二二条条萬里萬里小小路路くく建建立立あありりととかかやや山山をを鳳
皇皇山山とと号号しし岡岡山山ハハ夢窓夢窓國國師師がが皇皇 後後愚愚昧昧記記了了永永德德元
時時淨淨院院不不至至元元末末ハハ淨淨花花院院とと云云淨淨土土宗宗乃乃新新ありあり御御門門鳥
上上人人向向山山とと思思也也るるハハ淨淨花花院院をを康康永永之之年年小小坊坊御御門門鳥
地地不不遷遷しし其其地地をを等等持持寺寺をを建建地地即即今今乃乃之之条条坊坊門門高高倉
ららととししととをを證證ささぬぬるる也也王王

乃御所乃御所八幡宮八幡宮乃別當乃別當寺寺也也也也王王北北山山夜夜笠笠山山乃乃林林鹿鹿等等持持
院院ハハ康永康永元元年年果果課課院院大大夫夫人人をを葬葬ららせせしし地地分分りり故故子
尊尊氏氏卿卿也也是是不不從從ひひ玉玉へへるる分分へへくく等等持持寺寺のの第第二
世世東東陵陵永永興興禪禪師師夢夢窓窓國國師師了了代代くく伽伽藍藍をを攝攝營營しし等等持持
院院とと辨辨しし或或ハハ北北等等持持とと稱稱ささりり其其頃頃ハハ兩兩山山一一寺寺不不々々
義義堂堂周周信信住住山山乃乃延延文文之之年年四四月月尊尊氏氏卿卿をを葬葬りり後後冬
日日万万年年云云とと改改むむ此此寺寺をを以以てて京京都都將將軍軍家家乃乃墳墳墓墓乃乃地地とと定定めめらら終終たたり
又又鎌鎌倉倉あありり左左馬馬頭頭基基氏氏朝朝長長龜龜谷谷乃乃地地をを點點しし林林院院
をを管管すす尊尊氏氏卿卿乃乃古古先先印印元元禪禪師師等等持持寺寺乃乃歷歷代代不不々々其
住住をを請請ししてて用用山山ととおおしし長長壽壽寺寺殺殺妙妙義義仁仁山山とと稱稱
也也今今長長壽壽寺寺不不尊尊氏氏
乃乃長長壽壽寺寺不不尊尊氏氏

先進繡像玉石雜誌卷第八終

